

浦項製鉄所あれこれ

海外だより
~~~~~

金 鐵 佑\*

日本鉄鋼協会の会員の皆様、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。玄海灘のこちら韓国の浦項製鉄所より、皆様に心からのご挨拶をお送りします。そして浦項製鉄所に関する幾つかのトピックをお伝えします。

## 韓国観光の新名所として脚光

浦項製鉄所がある浦項市は北緯 36 度 3 分、東経 129 度 23 分、韓半島の東海岸にあつて、緯度は日本の福井や土浦附近、経度は九州の長崎附近に相当します。また、浦項製鉄所の南西 46 km の地点に新羅の旧都慶州があり、新羅千年の旧文化遺跡が存在し、四季を通して観光、新婚および修学旅行の人たちが訪れています。というのも、ここは気候温暖で冬期でもほとんど雪が降りません。

浦項市より西へ 95 km 行くと文化教育都市大邱があり、南西に 120 km 下れば韓国最大の商業港釜山、北西へ 400 km 上がれば首都ソウルがあります。故朴大統領の業績の一つである高速道路で行けば、釜山まで 2 時間足らず、ソウルへは 5 時間の道のりです。故朴大統領最大の業績はなんといつても、浦項製鉄所を誕生させ韓国重工業の牽引車的役割をさせたことにあります。浦項製鉄所建設の偉業は小学校の教科書にも記載され、教育材料として TV、ラジオ、新聞などにたびたび紹介され、国内の隅々にまで知れわたっています。したがって、今では浦項製鉄所は新羅の古都慶州と共に、韓国観光の新名所の一つとなり、観光と修学旅行シーズンには観光バスが列を連ねています。統計によれば、1973 年 6 月第 1 高炉火入れ以来現在まで、約 254 万人の訪問客が訪れ、その中には外国人もかなり多く、福田前首相、ヒース前英国首相、コーエン MIT 教授、馬紀壯中国鋼鉄公司会長など、各層各界の人たちが訪れています。日本の学界からも東北大学の矢沢、萬谷、大森教授、名古屋大学の西教授、千葉工大の依田教授、九州大学の清水教授などが浦項製鉄所を訪れています。

## 浦項製鉄所が生まれるまで

韓国動乱の後、深刻な鋼材と屑鉄不足を打開するため、1958 年に李承晩政権下で国内鉄鉱石対象に粗鋼年産 20 万 t、1962 年には民間投資で年産 32 万 t の一貫製鉄所計画が、いずれも資金難のため流産をしています。

しかし、朴大統領が最初に打ち出した第 1 次経済開発 5 箇年計画の実施は、韓国の産業構造を土台から大きく変化させ、ますます急増する鋼材需要は 1965 年には

50 万 t 台になる傾向を見せ、鋼材輸入の外貨負担は耐え難いものとなり、そこで再び一貫製鉄所計画が韓国近代化の必須条件として浮上しました。また、国際金融も飛躍的発展の氣勢を見せている韓国に関心を寄せ、1967 年 10 月には米、英、仏、伊、西独の 5 ヶ国による国際借款団と韓国政府との間に、粗鋼年産 60 万 t 規模の一貫製鉄所建設に関する基本協定が結ばれました。さらに 1968 年 4 月には政府出資の浦項綜合製鉄株式会社が創立され、政府は初代社長に早稲田の理工科出身、終戦後帰国し陸士、国防大を経て予備役陸軍少将、大韓重石社長の経歴を持つ朴泰俊氏を任命しました。製鉄業の本質に深い洞察力を持つ朴社長は、とくに技術面を重視し、政府をして国際的権威のある日本の鉄鋼 3 社（八幡、富士、日本鋼管）と技術諮問協定を結ばせました。この時点で浦項製鉄所と日本鉄鋼業との間に技術協力関係が生じました。

しかし、この計画は最初から資金調達と技術面で無理があり、結局、1969 年 9 月には国際借款団の契約不履行により解約になりました。しかし、韓国の近代化を押し進め富強な国家を建設しようと、執念の鬼と化していた故朴大統領は最後まであきらめず、借款先を日本に向けて一貫製鉄所計画を推進させました。これに応えるため、製鉄所建設の最高責任者である朴社長は、官民協力の先頭に立ち日本政府、財界、業界に向け情理を尽し、根気強く韓国の政治経済環境、韓国の極東平和への努力などを訴えました。韓国側のこのような真剣な努力の結果、鉄鋼業界、財界および大蔵、通産、外務など政府当局の合意が得られ、1969 年 12 月には韓日両国間で対日請求権、輸出入銀行その他を含め内外資 3 億 1 千万ドル、粗鋼年産 103 万 t 規模の一貫製鉄所計画の基本契約が成立し、難産であつた浦項製鉄所建設が軌道に乗りました。

## 浦項製鉄所は韓日両国の友好親善のシンボル

浦項製鉄所は 103 万 t の第 1 期を成功裡に完成させ、続いて 2 期、3 期、4 期の建設と操業を並行させ、現在の粗鋼 850 万 t 体制が 1981 年 2 月に完成しました。

その間、第 1 期から現在まで前述の鉄鋼 3 社で始まつた JAPAN GROUP の友好的な技術協力が続いています。

また、その間日本の製鉄各社に派遣した技術・技能研修員は 1202 名に達しています。これらの研修員たちは、日本の技術者から懇切丁寧な指導を受けたばかりで

\* 浦項綜合製鉄(株)技術研究所 工博

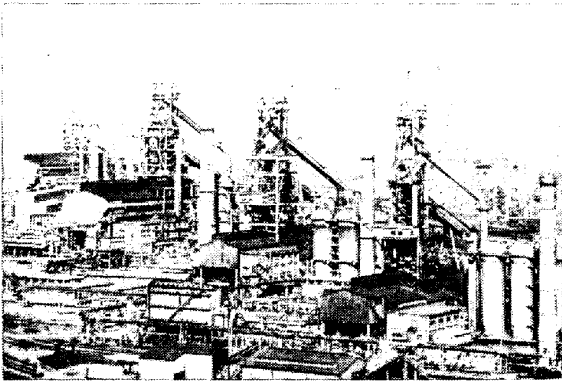


写真 1 第 1・2・3・4 高炉工場

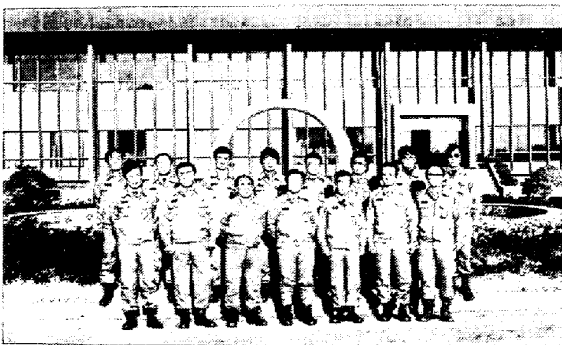
なく、人間の人格的な心の交流がありました。私はこのような国境を超えた人間的触れ合いこそは、結果的に韓日両国民の友好親善の基礎になると信じています。

浦項製鉄所の成功要因は幾つか挙げられますが、不可欠の要因の一つは、隣国である韓国の立場、事情を深く理解して提供された日本の経済的および技術的援助であったといえます。とくに浦項製鉄所にとって、日本製鉄業は育ての親であり薫陶の師でもあります。浦項製鉄所は韓日両国の共同作品であり友好協力の結晶です。

#### 浦項製鉄所のプロフィール

浦項製鉄所は昨年 2 月に第 4 期を完成させ、一応最終段階に入りました。製鉄所敷地は約 270 万坪、従業員は 1 万 4 千 6 百名、切り込み型の専用港は内港水深 -12 m、外港 -16 m で 10 万 t 級船舶ができます。原燃料事情はほとんど日本と変わらず鉄鉱石は豪州、印度、ブラジルなど、原料炭は豪州、カナダ、米国から輸入しています。

主要設備としてコークス 4 炉団、焼結機 5 基、高炉 5 基で溶銑 810 万 t、100 t と 300 t 転炉各 3 基で粗鋼 850 万 t 規模です。その他にブルームとスラブ連鑄、分塊 2 基、熱延 2 系列、冷延、厚板、線材、電気鋼板工場などがあります。この他に私が担当している技術研究所があり、敷地 1.4 万坪、実験棟 1 つ、研究棟は 2 つ目を増築中です。所員 127 名中研究員は 66 名ですが、研究

写真 2 技術研究所の幹部研究員  
前列中央が著者

開始後 3 年しか経たず、本格的な研究活動は今後のことです。

従業員たちの厚生福利施設は国内随一と定評があり、教育施設も幼稚園から高校まで完備されており、子弟に対する奨学制度、職員の留学制度も高く評価されています。

#### 神話を生んだ“黄色い軍団”

浦項製鉄所を訪問すると、従業員たちの黄色い制服の色がいやでも眼につきまします。国内の人たちは浦項製鉄所の従業員を“黄色い兵士たち”とニックネームで呼び、浦項製鉄所を“黄色い軍団”にたとえます。このニックネームの起源は従業員たちの規律、綱紀の厳正さからも由来しています。その端的な表われが建設工期の厳守です。工期は厳守どころか、かえつて常に短縮され、1 期より 4 期まで延べ 349 日も短縮され英大な建設費の節減となりました。“工期は短縮されるためにある”が浦項製鉄所のジンクスです。浦項製鉄所は出発当初、IBRD (International Bank for Reconstruction and Development) を始め大部分の見方は否定的でした。しかし、浦項製鉄所はオイルショック以後の度重なる不況にもかかわらず、民間と国営を問わずただ一度も赤字を出さず、借款返済を遅らさない唯一の企業です。また、浦項製鉄所は開発途上国に付き物の、賠償や借款にまつわるスキャンダルの無かつた唯一のサンプルです。欧米の製鉄人に会うと異口同音に“驚異的速度、奇跡的成長”といひます。

浦項製鉄所を語る時不可欠な登場人物は、“創業の人”朴泰後会長（前社長）です。欧米人の中では朴会長は“ジェネラル パーク”で知られています。多分、前述の業績を踏まえてでしょうが、ある大学教授が私に“朴会長は国内では神話的人物だ”と語りました。

全斗煥大統領が率いる政府は、意欲的な第 5 次経済社会発展 5 箇年計画を発表し、1982 年から 1986 年の間に第 2 の挑躍を試みようとしています。そのため政府は鋼材需要を見越して、再び朴会長に全羅南道光陽湾に製鉄所建設を命じました。これはやつと浦項製鉄所を仕上げた私たちにとって、決して楽な仕事ではないが国家の繁栄を賭け、朴会長を中心に立派にやり抜く覚悟でいます。

#### もつと近くて近い国に

最近では学術技術分野の国際交流が盛んです。とくに日本は外国との交流が活発です。私が韓国に帰つてこの分野を見ますと、韓日両国間ではほとんど交流が無いことに気がきました。国際親善には学術技術交流が最も有効です。その意味で私は周囲の人たちに日本の学会加入を勧めています。私は韓日両国が“近くて遠い国でなく、近くて近い国”となるよう心から願っています。

貴協会の会員の皆様のご健康と発展を心からお祈りいたします。  
(本文原文のまま)